

『金閣寺』論序説

—— 犯罪実行者の手記 ——

佐藤 秀明

1

『金閣寺』は、一人称独白体の形式で書かれた小説である。一読すればすぐに分かるこの単純な事柄は、もっと注意されている。自らを「私」という一人称を使って呼ぶ、「溝口」という名の男が、この小説の語り手である。いや正しくは、「右のやうな記述から」とか「筆を省いて来た」とかいうことばから、これは手記であり、「私」はその書き手であることが判明する。いつ、どこでこの手記が書かれたかは分明ではない。しかし、金閣放火後に、幼時から金閣放火までのことを書いたというのは紛れようがない。

おそらく、このような形で自己を表現することは、「私」にとって初めての経験であつたにちがいない。「今日まで、詩はおろか、手記のやうなものさへ書いたことがない」と「私」は明言しているのである。さらに、「私」が吃音であることもこの場合重要な因子となる。たぶん「私」は、経験と思考に関するこれほど長い内容を音声言語化したこ

ともない。「人に理解されないといふことが唯一の矜りになつてゐた」と言い、「ものごとを理解させようとする、表現の衝動に見舞はれなかつた」とも「私」は言う。しかし、現にいま「私」は、人に「理解」されるように「表現」しているのである。「私」が「唯一の矜り」を捨て、大きく変貌を遂げたことは疑いえない。その契機が、金閣放火にあつたのは想像に難くないにしても、その断定は避けよう。だが、手記には書かれなかつた「唯一の矜り」を捨てるドラマが「私」の内面で起こつたことは、納得しなければならぬ事実なのだ。「金閣寺」の読解は、手記執筆の當為までも含み込むことで成立するはずである。

『金閣寺』を「私」の手記として捉え、書かれなかつた内面のドラマまでも含み込む本論の立場に、W・イーザーの『行為としての読書』^(注1)や小森陽一の『構造としての語り』^(注2)の影響のあつたことを、ここで記しておくのは適當だと思われる。個々のどの部分にヒントを得たというよりも、むしろテクストを再読する過程で生じた発想の始まりに、読む者からすれば自然に感じられる仕方であつたからである。^(注3)語りに内包される読者の概念、語られた内容を語りそれ自体によつて洗い直す方法は、本論でも採られるが、それによつて、『金閣寺』に関するいくつかの重要な批評との對話が成り立ち、その批評によつては捉えられなかつた『金閣寺』の奥行きを描き出せるのではないかと予想する。

『金閣寺』を「私」の手記とするならば、中村光夫の次のような批評——方法上の欠陥を衝くというよりは、三十一歳の三島の力みに軽く触れるといった体の文章にも、やはり拘泥せざるをえない。

作者の文章は、この小説でひとつの完成に達していますが、変質者の少年にこのような立派な文章が書ける筈がないという疑問は読者の心に浮かんできません。^(注4)

手記の書き手を「変質者」とするのは明らかな誤解として退けておいてよいが、言うとおりの、これほどの文章を一

徒弟僧であり放火犯である学生が書いたと想定するのは、少し無理があるかもしれない。これは、小説の設定のリアリティの問題である。もしかしたら三島は、文章家としての銜氣と若さゆえの謙虚さから、自分の文章をそのまま徒弟僧の文章とすることに、不自然さを感じなかったのかもしれない。ところが秋山駿は、小松川女子高生殺人事件の犯人や連続ライフル射殺事件の犯人に「まことに強烈な知的渴望」を認め、その手記に「小説家といった人達が書くものの中にはない、非凡なもの」「文学的にも優れている」ものを発見している。そして『金閣寺』をこれらの犯罪と并列に置き、むしろ「遅れてきた小説」と捉えているのだ。^(注5) 小説が現実に遅れるのは常としても、このような先例がある以上、そして秋山駿の、犯罪と犯罪小説に関する理解の仕方に説得力がある以上、『金閣寺』の手記に十分なリアリティを見出すことはできるのである。三島の放火犯への共感と、それに真つすぐ繋がる一人称の選択は、平凡な人間のステレオタイプ化した犯罪者像を粉砕するために働いたと見ていいのである。

ところで『金閣寺』の一人称を、小説の根本的な面と睨み合わせて問題にしたのは小林秀雄であった。小林は、一人称の告白体で書かれた草稿のある『罪と罰』を例に引きながら、次のように言う。^(注6)

で、あれは倫理問題なんだけど、結局は一つの倫理的な或る観念に憑かれたキチガヒを書いてるわけでしょ。だから、観念に憑かれたキチガヒのコンフュッションといふやうなものは、これは小説にならないんだよ。

小林は同じ対談で、『金閣寺』を「動機小説」「抒情詩」だと言う。この対談での小林秀雄の発言は、金閣放火事件直後に書かれた小林のエッセイ「金閣焼亡」^(注7)に直接繋がっている。「金閣焼亡」で小林は、放火犯を「狂人」だと言い、狂人は間違つて考えるのではなく、「正しい考へに閉ちこめられて身動きが出来ないのである」から、「他人が存在しない」と言う。一方対談の方では、「君のラスコルニコフは、動機といふ主観の中に立てこもつてゐる」と言うのだから、これは「金閣焼亡」のことばで言えば「狂人」ということであり、「狂人」の「主観」に「立てこもつてゐる」

から「動機小説」で、そこには「他人が存在しない」のだからポリフォニーとしての「小説」ではなく「抒情詩」だということになる。一人称の小説では、語り手の「私」を含めて、すべての人物は「私」の主観を通して描かれるから、厳密な意味での他者は立ち現れない。その上、その小説が犯罪行為までの経過を描いたものであるならば、その内容は容易に他者の前には曝されないから、二重に主観的にならざるをえない。小林秀雄の言う「動機小説」「抒情詩」という規定は、原理的には正しい。したがって、田中美代子が蜘蛛の巣づくりの比喻を用いて、「蜘蛛には必要にして十分な外界がみえていないわけではない」と暗に小林への反批判を試みても、むしろその消極性を露呈するにすぎないのである。ならば、一人称の手記という形式は、『金閣寺』にとって避けるべき設定だったのであろうか。

ここで、この小説の重要な主題の一つである「美」を思い起こしておこう。小林との対談での、「美といふ固定觀念に追ひ詰められた男」という三島のことばを引くまでもなく、美は「私」に対し、「固定觀念」として「絶対的」な力を振るうようになる。^(注9)「美といふ固定觀念」が「絶対」であるためには、それを客観的に描くことはできない。言うまでもなく客観とは、世界を相対的に眺めることで、絶対はまずありえないからだ。ならば、一人称独白体の形式は必然である。けれども、一人称の手記を採るとするのは、ある危険を伴う。書き手にとっての觀念が絶対的価値を持たねばならないのだが、そうなる書き手である「私」は、小林の言うように「或る觀念に憑かれたキチガヒ」となり、そうなるとその手記は、独善性に陥りやすいからである。

とはいえ、「固定觀念」を描くとは、その独善性をも併せて書くことではないのか。独善性を批評する客観的視点を設定してしまつては、「固定觀念」は戯画に堕ちる。「固定觀念」であれ犯罪であれ、それらは人が単独で世界に對抗するきわめて鋭い論理にはかなるまい。それこそは、秋山駿が犯罪者から感じ取った文学の原型であり、それを捕まえるには内側から描く以外にないのである。三島が犯罪者の手記という形式を採ったのは、作者の反社会的姿勢の

表れとの理解もちろん成り立つが、むしろ世界に対峙した人の孤独な内面に、文学の原型を嗅ぎ取った作家的直感のなせるわざだと言うべきであろう。

しかしそうではあっても、手記の独善性の問題、あるいはレベルを変えて言えば作者の主観性の問題は、依然として残る。小説の読者が、この立て籠もった主観の中に十分に浸ることができるといふ問題である。小林秀雄よりも早く『金閣寺』の文学的達成を賞賛した中村光夫は、それでもこの小説を「観念的私小説」と呼び、「この主人公は他の作中人物から疎外されているように、僕等からも疎外されています」と、厳しい注文を忘れなかつた。そして中村光夫、小林秀雄によって指摘された手記の閉鎖性は、三好行雄に受け継がれ、『金閣寺』の一定の評価を形成したと思われる。三好行雄は、「モノローグにともなう難解さを消すために」「伏線による暗示」が駆使され、結果として日常的現実には安易に依拠しない、論理的に鞏固な作品世界が成立したと評価して、その論理を精密に分析したのである。^(注1)だが、それでもと言うべきか、いやそれゆえにと言うべきであろう、中村光夫が指摘する、いわゆる三島ファン以外の読者の共感を得られないという評価は覆せない。素材や日常性に依拠しない、牢固とした論理構造を持つ文学世界の創造というプラスの評価は、その裏側に、論理が他者を締め出すというマイナスの評価を貼り付けているのである。だが、もしこの手記の書き手である「私」が、「現実の対人関係」(小林秀雄)を、この手記を書く場で持っていたとしたらどうであろう。そうであれば、そこには対話を発見することができ、その対話に読者の位置すべき場所を見出すことも可能になるのではないか。手記が、原理として主観的ならざるをえないにしても、独善に陥らないための必要な仕掛けは施されているのではないか。——しかし、これはまだ見込みの発想にすぎない。もう少し手記という形式について考えたい。

そもそも自分の体験した事柄を「手記」に記すとは、「動機といふ主観に立てこも」ることなのであるうか。むろん、

事の後に自分の「動機といふ主観」を確認するために、自己を言語化するということはありうるし、それがその人にとって無意味であるとも思えない。しかしそうであったとしても、言語化するとは、免れ切れない性質として他者に向かっているのを否定できない。なぜなら、言語化する言語とは、「私」がいかに「私の言葉」を強調しようとも、それは「私」のものであると同時に他者のものでもあるからである。そればかりではない。手記には、「私」の他者に向かう積極的な姿勢も指摘できるのだ。「人に理解されないといふことが唯一の矜り」「私の存在理由」だと言い、「表現の衝動に見舞はれなかった」と言うが、これは書く時点での自己意識ではない。そう言う「私」が、「私の言はうとしてゐることを察してもらひたい」と、他者へ何度か呼びかけているのである。^(注12)したがって、自己確認のためにこの手記を書いたとは言えない。たとえ、他者へ向けて書く姿勢をとることで、自分に不明瞭な事柄を理解の領野に引き上げることがあったとしてもである。それは、例えば「私を詩人肌の少年だと速断する人もあるだらう。しかし……」と、他者の「速断」を先廻りして正確な事実を書くこととする姿勢に、他者への指向性をはっきりと出ているからである。また「人に理解されないといふことが唯一の矜りになつてゐたから、ものごとを理解させようとする、表現の衝動に見舞はれなかった」という文章を圧縮して考えると、「私」にとつて「表現」とは、「人に理解される」ためのものであることが分かる。田中美代子は「自他の理解の橋を壊し、孤独の障壁をたてるために語るのである」と言うが、^(注13)「私」のエクリチュールは、このような異様な孤独とは全く逆の姿勢から出ている。よつて、少なくとも手記を書く「私」の態度に限つて言えば、中村光夫や小林秀雄が言うような閉鎖的態度とは言えない。

では、この手記は誰に向けて書かれたのであろうか。杉本和弘が言うように、小説の読者はわれわれであるが、この手記の読み手は作品の中にしかない。^(注14)そして、他者への指向性は明白に出てはいても、それが特定の誰なのかは明示されていない。そこで、この手記は、作中の不特定の人に向けて書かれたものである、とさしあたり定義しておくことにしよう。

だが、手記に度々書かれているように「理解されないといふことが唯一の矜り」だった「私」が、顔立ちも定かでない不特定の他人に「理解」されようと望むのは、ちよつと不思議な感じがする。「私」がメッセージを届けようとしているのは、多くのごく普通の生活者なのだろうか。他人に自己の理解を望むことは、「私」の「唯一の矜り」と激しく対立しているのである。その対立を超えて書くとき、読み手のすべてがごく普通の生活者で、日常の中で他者といかほどか交わり、現実感覚も身につけ、生活も道徳も悪もとりわけ目立つ仕方でなく実現している人であるならば、書き手のかつての特異な行為と孤独な境涯は、絶望的な距離の向こうにあるように思われる。

とはいえ、先にも述べたようにこの手記は、不特定の読者に向けて書かれたものである。そう言えるのは、手記のどこにも特定の読者が明記されていないからであり、おそらくは、もう一つ、「私」の生きる姿勢と関わるからでもある。「私」は金閣に火を放ったあとと死のうとするが、きつかけを得ず、外へ飛び出し、小刀とカルモチンを投げ捨てる。そして「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思つた」と記される。「一ト仕事を終へて一服してゐる人」がとりたててそう思うわけではないのだから、この「生きよう」は、ごく平凡な生を

示している。とすれば、書かれる内容はともあれ、「私」の書く営為は、ごく平凡な生と断絶してはならない。手記の受け取り手が特定されなかったのはそのためである。

にもかかわらず、「私」は、顔も見えない相手に「私の言はうとしてゐることを察してもらひたい」と呼びかけるであろうか、という疑問を消せない。不特定の人の中から「察してもら」える新たな理解者を求めてもいるのだが、そこへ声を届かせるためには、いわば反響板とでも言うべき、メッセージの中心的な受け取り人が想定されているのではないか。見知らぬ人々の中に、自己のことは過不足なく受け止めてくれるであろう知己を想定する。「私」の中で未だ形を成さない思いが、そうすることとばとなつて出てくるような受け手。その受け手に向かつては、真摯な叫びを、前置きなしに放つことのできる装置。「私」の手記の書きぶりの中に、不特定という透明な読者ではなく、想定されたある読者像をぼんやりと見ることができるのである。

例えばこんな文章——「吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障碍を置いた」。(注¹⁵) 三好行雄は「いふまでもなくとの但し書きは、あるいは読者にとって自明のこととはいいたいかもしれぬ」と言うが、これはやはり鋭敏な指摘である。この「いふまでもなく」に、書き手の想定する二種類の読者像を見て取ることができるのだ。一つは三好行雄が言うような「自明のこととはいいたがたい」と感じる読者像で、「吃り」がかくの如き働きをしたのを自明のことであると理解するように求められる読者像である。そういう読者の意識の変換を迫る、戦略的なレトリックと言つてよい。もう一つは、「吃り」が「私と外界とのあひだに一つの障碍を置いた」事実を自明な地平で理解する読者像で、これは、必ずしも素早い理解力によって自明となることではないので、あるいは「私」という人物について既に知つていることが前提とされているのかもしれない。また、次のような文章もある。「かういふ少年は、たやすく想像されるやうに、二種類の相反した権力意志を抱くやうになる」。「かういふ少年」とは、吃音によって内界

と外界との間に障礙が置かれた少年のことである。「無口な暴君」と「内面世界の王者、静かな諦観にみちた大芸術家」という二つの夢がこのあとに記される。この表現も先の文章と同様に、二種類の読者像が想定されており、自明でない読者を自明な読者に変換する意図が盛り込まれている。つまり、書く「私」によって想定された中心的読者像は、「たやすく想像」することのできる読者像なのである。「たやすく想像されるやうに」と呼びかけられた人間は、また「何か拭ひがたい負け目を持つた少年が、自分はひそかに選ばれた者だ、と考へるのは、当然ではあるまいか」と呼びかけられる人間でもある。「当然ではあるまいか」という、「何か拭ひがたい負け目を持つた少年」からの呼びかけを、そのまま丸ごと「当然」であると肯定できるのは、彼自身が「何か拭ひがたい負け目を持つていなければならないだろう。そして「自分はひそかに選ばれた者だ、と考へ」ているならば、この「当然」であるという肯定は、書き手、読み手双方にとって完璧となる。「当然ではあるまいか」と全意的な同意を読み手に求め、その内容が「何か拭ひがたい負け目を持つた少年」という相対的少数者に関することであるならば、「私」が想定している中心的読者像は、かなり具体的な形をとつてくる。その人物を、ここで名指すことさえできそうである。

次の引用は、交通事故で死んだと伝えられた鶴川に関する「私」の思考である。ここでは、その内容を問うのではなく、「私」の書きぶりを見ていきたい。

鶴川の住んでゐた世界が明るい感情や善意に溢れてゐたとしても、彼は誤解や甘い判断によつてそこに住んだのではなかつたと断言できる。(略) その明るさは私の暗さとあまりに隔々まで照応し、あまりに詳細な対比を示してゐたので、時折鶴川は私の心を如実に経験したことがあるのではないかと疑はれた。さうではなかつた！これは、鶴川も「暗い感情」を持っていたのではないかという「私」の内言に対する反駁である。「彼は誤解や甘い判断によつてそこに住んだのではなかつたと断言できる」と「私」は言うが、一体誰に向かつて「断言できる」と

いう強い語調で迫るのであろうか。そして「さうではなかった!」という、感情的な語りかけを思わせる調子も。「私」は、手記を書くこの場において訴えかけているのではないだろうか。鶴川のことは、この手記において唯一と言ってよい、真相が伏せられたまま書き進められた事柄である。「私」は、鶴川が明るい世界の住人だとずっと思い込んでおり、そして鶴川の柏木宛の手紙で、そうではなかったと知るのだが、そのあとに書かれたこの手記においても、思い込んだふりを通している。そうすることで、事の意外性を一般の読者に実感させる効果は大きくなった。しかし、鶴川の暗い一面を知ったことは意外ではあっても、結局「私」は、最初から抱いていた明るい鶴川の生を信じるのだから、手記を書く時点では、今さらその意外性自体は問題にならない。もとより、「私」の実感に即した書き方は認めねばなるまい。しかし、驚きかつ意外に感じた手紙の場面よりずっと前に、「さうではなかった!」という感情を表に出した書きぶりがなされており、それこそが問われねばならないのである。問題とすべきなのは、これを書くというレベルであり、書かれるべき事柄がすべて終わった、手記執筆の時点に目を向けるならば、次のようなことが言えるのである。この部分のあとで、手紙から読み取れる鶴川の暗い一面を否定し、明るい鶴川を信じた自分の選択を読み手に示すのだが、その心理的な根拠を、鶴川の死を知った時点を執筆するこの場で、あらかじめ示しておくという意図を持ったことばとして機能しているのである。手紙という確実な証拠を前にしながら、自身の実感に即してそれを覆す。そのために前もって自分の心情を訴えかけておく。その意図が、「断言できる」「さうではなかった!」という強い語調をもたらしたのだ。ならば、この手記執筆者である「私」には、当然一人の具体的な読者像が想定されていなければならない。それは、鶴川の人物像についての「私」の確信を強調すべき相手である。この読者は、先の「何か拭ひがたい負け目を持った少年が、自分はひそかに選ばれた者だ、と考へるのは、当然ではあるまいか」という呼びかけに、「当然」だと同意することのできる「何か拭ひがたい負け目を持った少年」の像と一致する。内臓足

の友人、柏木である。

「私」は柏木によって「人生」に促され、「私」が何かしようとする節目には、度々柏木が関係し、また柏木のことか思い出される。性交渉を持つとした二人の女は、柏木の斡旋によるものだし、寺を出奔するときには柏木に金を借りる。日本海を前に金閣を焼こうという想念が浮かんできたときにも、柏木のことか思い起こされる。放火直前に劇甚の疲労に襲われたときには、世界を変えるのは認識だとの柏木のことばが思い出され、そこから立ち上がったのも、柏木の唱えた「臨濟録示衆の章」を想起したからである。何より柏木は、「自分がはじめて同格で話し合ふ喜びをさとした」相手だと記されるのである。柏木は、想定された中心的読者としてまことに相応しい存在であった。

そう考えると、やや唐突に見える手記の中の文章も、違和感なく納得することができる。煩を厭わず、二三の例を挙げよう。「その年の十一月の私の突然の出奔は、すべてこれらのことが累積した結果であつた」。出奔についてはこのとき初めて記されたのであるから、一般の読者にとっては「出奔は」という主語はもとより、「その年の十一月の私の突然の出奔」までが未知の情報である。読者は、すぐさま未知を既知に変換して理解しようとするが、そのときには暗に、これを既知として受けとめる人をモデルとして、そのモデルをなぞるように意識を切り替える。そういう理解の仕方を求める書き手の頭にある読者モデルが、柏木にほかならない。

もう一つ、これは放火を決意したあと五番町の遊廓に行く件りである。「自殺を決意した童貞の男が、その前に廓に行くやうに、私も廓へ行くのである。安心するがいい。かういふ男の行為は一つの書式に署名するやうなもので、童貞を失つても、彼は決して『ちがふ人間』などになりはしない」。ここにも、読み手の心理を先取りし、それに対し注文を付ける箇所がある。「安心するがいい」という呼びかけは、読者によつては奇異に響くかもしれない。しかし、これも柏木に向けて書かれたことばであるのを理解すれば、十分納得できるであらう。柏木は、初対面の際「童貞を

破つた顛末」を長々と語り、「それ以来、安心して、『愛はありえない』と信ずるやうになつた」と言う。つまり柏木は、「童貞を破つた」ことで「ちがふ人間」になつた「顛末」を語つたのだ。したがって「安心するがいい」ということは、内在化した読者である柏木に直接向かうことばとして機能しているのである。このすぐあとで、商売女は誰でも平等に客とするが、それが自分には我慢がならないと言つた柏木のことばを思い出すのは、ゆえないことではない。

三つ目の例は、特に奇異な感じを与える表現ではない。鶴川が、「私」と柏木との交友について忠告したのに対し、鶴川ならともかく自分には柏木が相応なところだと述べた箇所である。「そのとき鶴川の目にうかんだ、言ふに言はれぬ悲しみの色を、のちのち私は、どんなに烈しい悔恨を以て思ひ起したかしかない」。「烈しい悔恨」とは、初読の読者には何のことやら分からず、のちの出来事を予測させることばとしてのみ働く。のちに鶴川は自殺し、自殺までの経緯を柏木に書き送つていたことが分かる。その叙述の手前のこの文章は、ただ一人の読者だけは、「私」の「烈しい悔恨」を如実に感じ取るはずだと期待して書かれた文章なのである。

以上見てきたように、この手記は柏木に向かつて開かれており、決して「動機といふ主観の中に立てこもつてゐる」(小林秀雄)わけではない。もとより、この柏木とは柏木本人ではなく、「私」の主観に内在化した柏木である。そうではあつても、その状態を「主観の中に立てこもつてゐる」とは言わない。また、手記は不特定の読者に向けて書くという形をとつており、不特定の読者と、そしてテクストの構造上その外にいるわれわれ読者も、一方的に「私」の言説を受けとめるのではなく、柏木を合わせ鏡とすることで、「私」を柏木によって相対化し、「私」か柏木かのいづれかに足場を定めて見ることも可能にしている。そうならば、中村光夫の言う主人公が読者から隔てられているという批判も、かなりの点で解消するのではないか。

小林秀雄は、『金閣寺』を「動機小説」と呼んだ。『罪と罰』は「やつちやつてからの小説」だから、対人関係や対社会関係が生ずるが、「やるまでの小説」では、小説の世界は「主観」の中でしかないから小説というより「抒情詩」だと言うのだ。つまり、「動機小説」と「抒情詩」とは、一つのことを言っているのである。こういう文脈の上で語られた「動機小説」ということばが、その後の『金閣寺』の読み方にどの程度の影響を与えたかは、にわかに判定しにくい³が、むしろこの文脈から外されて、きわめて単純な意味に脱色されて、同時代から今日までの『金閣寺』の読み方に組み込まれてきたという感じを持つ。中村光夫は「金閣がやがて彼によって焼かれねばならぬ必然性」と言い、これが「論理的必然」であることを強調する。三好行雄も『作品論の試み』に収めた『金閣寺』論で、「論理的必然性」を繰り返し、その「必然性」を解き明かしてみせた。これらは結局、『金閣寺』が「やるまでの小説」で、小説は最後の金閣焼亡に向かって進むのだから、なぜ金閣が焼かれるに至ったかの「論理的必然性」、すなわち「動機」を読むという読み方を示唆しているのである。三島由紀夫自身も「私が『金閣寺』で書いたことは、犯罪の動機の究明であつたが」と言う。^(注16)金閣炎上までを描いた小説であること、犯罪の動機を描いた小説であること、この二つが、非常に堅固な制度的な見方になっているのを感じる。

どうも『金閣寺』という小説を手にした同時代の読者は、六年前に焼失した鹿苑寺金閣を思い出さずにはいられなかったようだ。初刊単行本の表紙は、今野忠一による図案化された炎が描かれ、最後の炎上が暗示されている。文芸批評を職業とする人でさえ、六年前の記憶が、小説の読み方を呪縛していることに意識的ではなかった。同時代評を

見ると、『日本経済新聞』（昭和31・10・6）で白井吉見は、「標題どおり、金閣の焼失という、世間をさわがせた新聞のいわゆる社会ダネに取材したもの」（傍点引用者）と言っている。白井は『新潮』の合評会でも同様の発言をしており、同席した中村光夫も次のように言う。^(注17)

第一、小説は、ことに長篇の場合は、終りは一体どうなるかということを読者が知らない方がいいわけでしょう。しかし、三島の場合は、初めからわかっている。焼くにきまつているわけですよ。読者もそれをみんな知っている。その終りに作品でもって追いついていくということ、それはとてもむずかしいことなんだよ。

読まれることで成立するテキストが、この場合は、読まれる以前に「物語」を生み出してしまっているのである。当の作者の構想ノートでは、「火をつけるべくしてつけざる男の話にするか？」というプロットも考えられていたというのに。これは非常に奇妙なことではないか。そればかりでなく、小説を読む上で、きわめて不自由なことではないのか。

「動機小説」を小林秀雄の文脈から外して、結末に向けての動機を描いた小説という単純な意味で使うとして、なぜ動機小説という捉え方に異議を申し立てるのか。動機小説であるならば、なぜ金閣を焼いたのか、ということが読者の作品に対する問いかけになる。その答えはどのようにして出されるかと言えば、小説のことばのすべてを、金閣放火という網の目のふるいにかけて、残った物語切片を整理する。こうして三好行雄の言う「伏線」と「論理的必然性」が明白になるのだが、しかしこれでは、小説を一義的な意味の線上に並べて再確認をするにすぎない。物語切片の持っていた意味生産性は、こそげ落とされてしまう。

別の考え方もある。金閣放火を決意したあと、「私」は寺の門前で煙草に火をつける学生を放火犯だと確信するが、それが誤解であつたように、いかなるふるまいも動機という眼鏡で見れば、放火に直結させることができるのだ。河

上徹太郎は、中学生のとき短剣の鞘に傷をつけたことが、既に「金閣を焼く動機になつてゐる」と指摘し、その後何人かの評者に肯定されるのだが、「私」自身はこれを「中学時代に先輩の短剣の鞘に傷をつけた私は、人生の明るい表面に対する無資格を、すでに自分の上に明確に見てゐた」と、別の意味として捉えているのである。

あるいは、こんな考え方も成り立つ。「私」のふるまいと思考のすべてが、つまり生きてきたこと全体が、金閣放火の動機であるという考え。「私」自身、次のように明白に記している。

生れたときから、私はそれを志してゐたかのやうだつた。少くとも父に伴はれてはじめて金閣を見た日から、この考へは私の身内に育ち、開花を待つてゐたかのやうだつた。金閣が少年の目に世の常ならず美しく見えたといふそのことに、やがて私が放火者になるもろの理由が備はつてゐた。

したがつて、先の短剣の鞘に傷をつけたことを、「私」は「人生の明るい表面に対する無資格」と理解していたが、この「無資格」もまた動機の一つであつたと捉えることはできるだろう。河上徹太郎の批評を、誤りだとして退けることはできない。しかしこの小事件を、放火の動機として捉えるのと、「人生の明るい表面に対する無資格」と捉えるのでは、どちらが手記の書き手の人間性に深く関わっているかは判定するまでもない。

そもそも人の生とは、雑然とした性格をもつものではないのか。金閣放火を決意し、決行し、そのちに記述する「私」には、すべてのことが金閣放火と結びついてゐたやうな気がする。「生れたときから、私はそれを志してゐたかのやうだつた」と「私」が書いているように。すべてが、一つの行為に向かつて意味を整えたかのように見える錯覚、と言つていいだろう。したがつて、生きてきたこと全体が動機だつたという考えは、動機は誰にも分からないという考えと同義なのだ。動機という問いを立ててしまえば、闇に入り込むか、皮相な理解に留どまるしかないのである。少なくとも、手記に動機の「論理的必然性」があり、それを整理することで「私」のメッセージを理解できると

考えるのは、楽天的な傍觀者の態度でしかない。「人生の明るい表側に対する無資格」という、中学生が味わった痛みには到底届かないであろう。その都度その都度において、「私」の中で少なからず意識的であり、かつ書く時点においても自覺的である一つの方向性が、この「人生の明るい表側に対する無資格」という表現にも見出せるように思う。それは、「私」と世界との関係、「私」の内界をいかに外界に開くかということである。

4

吃音であるために、内界と外界との間に障碍があるのを感じていた「私」は、自己を外界に開くのに独自の思考を強いられてきた。しばしば孤独な内界に閉じ籠もっていたが、そこに安住していたわけではない。短剣の鞘に傷をつけた行為も、金閣放火も、「私」の外界に対する働きかけにほかならないのである。吃音ばかりでなく美も、外界への働きかけを妨げる原因であったのは言うまでもない。いま内界と外界との関係を見ていく上で、吃音や美という手記の中心的な問題からではなく、特徴的な意味を担わされたある単語に焦点を絞って考えていきたい。

この手記には、何度か「証人」、あるいは「目撃者」といったことが使われている。例えば「私」が村外れで待ち伏せした有為子は「恥の立会人」「証人」と記され、関係を持つとうとして失敗した下宿の娘も「恥の立会人」と言われる。また「私」は、有為子が死んだ事件の「証人」であり、南禅寺山門から見た奇妙な薄茶点前の「目撃者」でもある。老師の微行の「目撃者」ともなる。アメリカ兵の連れていた娼婦の腹を踏んだときには、「私」は「目撃者」はないのだ。証人はないのだと思う。五番町の遊廓の女、放火する晩に泊まった禅海和尚、金閣の中の国宝義満像も「私」の行為の「証人」だと書かれている。これらの用例から考えると、見るという個人的な感覚を、見る人間と

出来事Ⅱ世界との関係という抽象度の高い問題に設定し直していることが分かる。

この点で最も興味深いのは、アメリカ兵の連れていた女の腹を踏んだ事件である。「私」はアメリカ兵から煙草を貰い、それを老師に届ける。

「ほほう。御苦労だった」

と老師は、自分の顔の外れで笑ふやうな微笑をちらとうかべて言った。それきりであつた。(略)

私は退らねばならなかつた。不満が私の体を熱くしてゐた。自分のした不可解な悪の行為、その褒美にもらつた煙草、それと知らずにそれを受けとる老師、……この一連の関係には、もつと劇的な、もつと痛烈なものがある筈だつた。老師ともある人がそれに気づかぬことが、私をして老師を輕蔑させる又一つ大きな理由になつた。

「私」が老師に対して、過剰な期待を持つてゐるなどと批判しても意味はない。「この一連の関係」に「もつと劇的な、もつと痛烈なもの」を見て取るには、人は世界とどのように関係するかという地点に目を据えなければならぬ。老師が「それと知らずにそれを受けとる」ことで「褒美にもらつた煙草」の意味は大きく「偽善」へと変更してしまひ、さらには「偽善」であることも知られないから、「自分のした不可解な悪の行為」は老師に届かず、無視される。「褒美」の意味が変更され、「目撃者」「証人」がいなから、そもそもの発端であるところの「悪の行為」自体がなかったことになつてしまふ。「もつと劇的な、もつと痛烈なもの」とは、「自分のした不可解な悪の行為」の消滅を言うのだ。だとすれば、「私」が外界に対して「行為」をすることと結びついてゐたそのこと自体が、「行為」の消滅によつてなくなつてしまふ。「私」と外界との関係は、ばらばらになつてしまふのだ。

のちにこの事件は、女が老師に訴え出ることで露呈する。しかし老師は「目撃者はなかつたので」「すべてを不問に附し」てしまふ。「すべてを不問に附した」とは、結局なかつたことにしたということである。疑わしくとも犯人

を同定できないということと、事件は起こらなかったということとは全く別のことではあるが、しかしこの場合は同じこととして処理されたのである。これとちょうど逆なのが、「私」が「目撃者」となった、老師と祇園の女との逢引きである。「私」には、老師の「微行」^{おしゆび}を実証しようなどという気は毛頭なかったにもかかわらず、たまたま「目撃者」「証人」となったために、噂にとどまっていた老師の遊びが確実にあったこととして成立してしまったのである。このように、これを書く「私」にとつて「証人」とは、世界の成立に深く関わる存在として捉えられている。逆に言えば、世界は当事者だけでは存在しない、少なくとも存在の条件を満たしてはいないと考えているようなのである。したがって、五番町のまり子に金閣放火を「予告」するのも、若さゆえの偽悪的態度とばかりは言えない。

ところで五番町のまり子を「証人」とすることは、自己の理解を求めていることではないのか、という疑問がここに生じる。とすると、「人に理解されないといふことが唯一の矜り」、あるいは「私の存在理由」であることと、人に「理解」を求める気持ちとが並立することになるのだが、そのような心情がありうるのだろうか。ことばの論理的な接合においても、また、人としての感情においても、この両者が一人の人間の中で矛盾なく居合わせることは不可能だとは思われない。なぜなら、「人に理解されないといふことが唯一の矜り」あるいは「私の存在理由」であることは、必ずしも人に理解されたくないという気持ちと結びつくわけではないのだから。「唯一の矜り」や「私の存在理由」を字義以上に硬直して受けとめていては、「私」の感情の柔らかない部分を見過ごしてしまうだろう。外界に手を延ばすこと自体が、自己の外界への提示にはかならず、「唯一の矜り」を繰り返し言いながらも、それは度々試みられているのだから。

さて、この「証人」ということばは、言うまでもなく法律の用語である。周知のように、三島は大学は法学部に学び、特に刑事訴訟法に興味をもっていた。「法律と文学」というエッセイでは、「団藤重光教授が若手のチャキチャキ

であつた當時のこととて、講義そのものも生氣潑刺としてゐたが、『証拠追及の手續』の汽車が目的地へ向かつて重厚に一路邁進するやうな、その徹底した論理の進行が、特に私を魅惑した」と言っている。『金閣寺』に書かれた「証人」が、この「証拠追及の手續」の授業と深く関わっているのは十分予想される。^(注20) 団藤重光は、三島が東京帝国大学法学部に入学する一年ほど前、昭和十八年十二月に『刑事訴訟法綱要』という、本文八七〇頁、それに目次と索引の付いた厚い本を出版している。^(注21) そこには次のような文章がある。「事実の实体形成に關しては証拠による制約を受けることいふまでもない」。この「事実の实体形成」とは「事実の認定」のことである。つまり、「事実の認定」は、「証拠」によつてなされるということであるが、これをより正しく言えば「証拠」によつて裁判官の「心証」が形成され、その「心証」によつて「事実の認定」がなされるのである。『刑事訴訟法綱要』では、この「証拠法」を歴史的にも、裁判官の役割りにも、また手続き問題にも関わらせて論じているのだが、「証拠法」の変遷について書かれた箇所は、「私」と老師の關係を見る上でなかなか興味深い知識をもたらす。証拠法は、第一に素朴時代、第二に宗教時代（神判の時代）、第三に合理的時代へと変遷したと概観して、次のように述べる。

合理時代は更に分れて、第一に法定証拠主義、第二に自由心証主義の時代となる。法定証拠主義とは、各種の証拠方法の証明力を法律によつて一定する主義であつて、裁判官の恣意を防止する意味を有した。しかしそれはつひに不合理なるを免れなかつたのみならず、被告人の自白を以て証拠の王とすることは必然的に拷問の制と結合した。かやうにして自由心証主義の採用は証拠法發展の当然の進路であつたといふべきである。

老師と「私」の対立は、法定証拠主義と自由心証主義の対立の応用として捉えることができる。娼婦の腹を踏んだこと、老師の逢引きを目撃（老師の主観では追跡）し、芸伎の写真で悪戯をしかけたことについて、老師は「被告人の自白を以て証拠の王とする」法定証拠主義をとる。法定証拠主義においては裁く者の心証に關係なく自白を重視す

るから、老師の心証は表に出ない。老師は終始「無言」である。一方「私」は、第三者の証言がなければ事実の実体形成、すなわち事実の認定はなしえないという自由心証主義の立場をとる。法定証拠主義においては、本人の自白が必要となるため、ほぼ必然的に拷問が行われるが、老師の「無言の放任」は「私」に「拷問」として課せられたのである。^(注22)

さて、『刑事訴訟法綱要』には、「訴訟では犯罪事実につき証明を為し得ないときはその事実なきものとして取扱はれる」とある。「証人」という第三者を置く、「私」の外界に対する対し方は、刑事訴訟法の「自由心証主義」の「事実の実体形成」にびたりと当て嵌まるのである。手記の中では、「私」が岩波文庫本のベッカリーア著『犯罪と刑罰』を携帯していて、五番町のまり子にもこれを見せている。ベッカリーアは「犯罪が罰せられるについては、その犯罪の確実性が必要である」と言い、「犯罪の確実性」は「証拠」によって成り立つとし、「証人」についても一章を割いている。^(注23)

このように「証人」や「目撃者」ということばに着目すると、そこには「私」の外界に対する一種の硬直した心理を見ることが出来る。海軍機関学校の生徒の短剣の鞘に傷をつけた少年時代から、それは見て取ることが出来る。そのとき「私はあたりに人気のないのをたしかめ」ているのだ。「証人」がいなければ犯罪は成立しないというのが、「私」の固定的な論理となっていて、犯行を否定しようとするときには、その状況がどうであろうと、「証人」のいないことを根拠にする。娼婦の腹を踏んだときには、「目撃者はないのだ、証人はないのだ」という思いが「喜び」として湧き上がる。逆に、犯罪者たらんと欲するときには、意識的に「証人」をしつらえておくのである。ベッカリーアの『犯罪と刑罰』を見せられ、新聞記事に注目するように予告された五番町のまり子は、意識的にしつらえられた「証人」である。しかし、普通に考えれば、疑わしいということは、倫理的にはともかく、それだけで他者の中でのその

人の在り方を変更してしまふであらう。また犯行は、例えば短剣の鞘に傷をつけた事件のように、鮮やかな記憶として残る。しかし、「私」にとつては、「証人」がいず、事件が内界にしまわれてしまえば、現実とは無関係だという考へが、記憶や事実を凌駕してしまふのである。「私」の生活感覚は、ごく普通の日常感覚からは遥かに隔たつてゐる。非常に乾いた論理が行き渡つてゐるのである。「私」は「自分を明晰たらしめようとしてゐた」と言うが、このことは、世界が一定の論理によつて成り立つてゐるという自覚と無関係ではない。中村光夫は、これを「観念小説」と呼び、「ちやうど自然科学の実験に立ち合うように」と評し、三好行雄は「論理的必然性」をこの手記の特徴として挙げたが、そう言われる側面を「私」は間違ひなく持つてゐるのである。確かに、ある種の論理においては証拠（証人）がなければ、事実は認定されない――。

しかし、犯罪計画者が、いかなる論理にせよ論理を信頼しないで、どうして計画の実行などできようか。彼は、ちよつとした道徳の侵犯者などではないのだ。犯罪計画者は、自分の計画してゐるのが、犯罪であることによつて孤独になると言つていい。その孤独に耐えるには、世界の中に論理を設定し、その論理とせめぎ合う以外には、耐ええないのではないか。犯罪計画者は、その犯罪が反社会的であるために、世界の独自の論理の構築者となる。そしてその論理にきわめて厚い信頼を寄せてゐるかぎり、「私」は破壊者であると同時に遵法者、論理という「法」を守る人間でもあるのだ。「私」が求めているのが、世界の論理であるかぎり、「私」自身が破滅に向かわないのも理である。なぜならそれは、「私」と世界との論理、すなわち「私」と世界をいかに関係づけるかの論理であり、関係づけるという能動作用があるかぎり、それは「私」を生かす論理であり、生の論理であるからだ。「私はたしかに生きるために金閣を焼かうとしてゐる」と記されるゆえんである。

しかし、計画が実行され、そのあとにおいても、「生きようと私は思つた」と書かれてゐる点については、しばし

立ち止まらなければならない。犯罪計画者と犯罪実行者とは、全然別のものであろう。犯罪計画者が自滅するのは、おそらく犯罪が実行された時点だと思われる。それ以前の場合は挫折だと言えるのだが、実行後の自滅とは、社会の規範がそのときになって彼の中にどつと入って来て、彼の論理を侵食してしまうからである。犯罪者の論理は、社会の規範に比べれば絶対に弱いはずである。なぜなら、それは世界の、社会の論理に比べれば奇抜で、少数意見だからだ。だから犯罪計画者は、自己の論理を社会の風に当てないで、じつと孤独の内に守っているはずなのである。それは、官憲を恐れる気持ちに通俗化されやすいが、それ以前のレベルで、犯罪計画者は抽象的な論理そのものを守っているはずなのである。ところが、犯罪が達成されれば、犯罪者の論理は世界の中に曝されてしまう。しかし「私」は、犯罪を達成したところで、用意した小刀とカルモチンを谷底に投げて、「生きよう」と思う。そして、この犯罪までの出来事を手記に書き、その長い手記の最後を「生きようと私は思った」と、そのときの思いそのままを記して締めくくるのである。ということとは、当然「私」の論理にも社会の規範が侵入したであろうが、この計画が達成されたあとでも、自己の論理が侵食されなかったことを示していると思われる。

行為によって世界は変わったか。——柏木との議論から持ち越されてきたこの問いに対しては、「私」を「人生」から妨げていた金閣の、建築物としての姿が消滅したとしか、さしあたりここでは言えない。しかし、「私」にとつて世界が変わらなければ、「私」の論理は、世界に侵食されてしまったであろうと思われる。「私」が生きてこの手記を書くこと、それ自身が、「行為によって世界は変わったか」という問いへの答えになるだろう。それが、かつて議論をした仲である柏木を含んだ不特定の読者に向けて書くのであれば、「私」の論理は、まだ書かれるべき論理として保持されていたと言えるのである。

注

- (1) W・イーザー『行為としての読書』（轡田収訳、岩波現代選書、一九八二・三）
- (2) 小森陽一『構造としての語り』（新曜社、一九八八・四）
- (3) 『金閣寺』について一人称の語りの面から論及したものに、田中美代子「美の変質——『金閣寺』論序説」（『新潮』昭和55・12、『日本文学研究資料新集30 三島由紀夫・美とエロスの論理』所収、有精堂、一九九一・五）、佐藤秀明「三島由紀夫 金閣寺」（『近代小説研究必携3』有精堂、一九八八・八）があり、これを主人公の手記として論じたものに有元伸子「『金閣寺』の一人称告白体」（『近代文学試論』平成元・12）、杉本和弘「（私）の手記という方法——『金閣寺』の場合」（『名古屋近代文学研究』一九九〇・十二）がある。
- (4) 中村光夫「『金閣寺』について」（『新潮文庫』『金閣寺』昭和35・9、初版、引用は平成2・6、七十五刷による）
- (5) 秋山駿「恋愛の発見——現代文学の原像」（小沢書店、昭和62・10）
- (6) 小林秀雄・三島由紀夫「対談」美のかたち——『金閣寺』をめぐる（『文芸』昭和32・1、引用は『三島由紀夫全集補巻1』新潮社、昭和51・6による）
- (7) 小林秀雄「金閣焼亡」（『新潮』昭和25・9、引用は『新訂小林秀雄全集』第八卷、新潮社、昭和53・12による）
- (8) 田中美代子「美の変質——『金閣寺』論序説」（注3）
- (9) 三島由紀夫の「『金閣寺』ノート（その二）——創作ノート」（『波』昭和49・1）に次のような記述がある。「絶対的なものへの嫉妬／（略）／『絶対性を減らすこと』／『絶対の探求』のパロディー」。作品には「永遠の、絶対的な金閣」という表現がある。
- (10) 中村光夫「『金閣寺』について」（『文芸』昭和31・12）
- (11) 三好行雄「背徳の倫理——『金閣寺』三島由紀夫」（『作品論の試み』至文堂、昭和42・6）
- (12) 佐藤秀明「三島由紀夫 金閣寺」（注3）、有元伸子「『金閣寺』の一人称告白体」（注3）に既に指摘がある。
- (13) 田中美代子「美の変質——『金閣寺』論序説」（注3）
- (14) 杉本和弘「（私）の手記という方法——『金閣寺』の場合」（注3）
- (15) 注（11）に同じ。
- (16) 三島由紀夫『裸体と衣裳——日記』（新潮社、昭和34・11、引用は『三島由紀夫全集28』新潮社、昭和50・8による）

(17) 白井吉見・河上徹太郎・中村光夫「合評会・現代文学の諸表情10 文学者の自己表現」〔新潮〕昭和31・11

(18) 注(9)に同じ。

(19) 注(17)に同じ。

(20) 『金閣寺』発表の六年前に書き下ろして刊行された『愛の渴き』にも、「証拠」「証人」「目撃者」の語が、意味上のしるしつきのことばとして十箇所近く使われている。悦子は園丁の三郎を愛しているが、この感情を他人に悟らせないように万全の注意を払う。「証拠」がなければ愛は存在しないことになるのだが、逆に悦子は、三郎と女中の美代との愛の「証拠」を捜すのにやるきになる。

(21) 団藤重光『刑事訴訟法綱要』(弘文堂書房、昭和18・12)

(22) 野口武彦は、「はじめに判決ありき——三島由紀夫と刑事訴訟法」(『三島由紀夫と北一輝』福村出版、一九八五・十)を、「法定証拠主義」と「自由心証主義」の違いに基づいて立論している。しかし、論のかなめとなる、三島が学んだのは戦中の「法定証拠主義」だとする見解は誤りである。戦中においても団藤重光は「自由心証主義」を採っている。これは昭和十八年十二月発行の『刑事訴訟法綱要』(初版だけで、用紙配給の都合上増刷はされず、戦後に再版が出た。——「団藤重光先生に聞く」(第二回)——わが心の旅路)『法学教室』一九八五・六による)で確認できる。

(23) ベッカリア『犯罪と刑罰』(風早八十二・風早二葉訳、岩波文庫、一九三八・十一、第一刷、引用は一九九一・二、第43刷による)

(24) 注(10)に同じ。

付 記

本論は、日本近代文学会関西支部秋季大会における「《シンポジウム》三島由紀夫『金閣寺』をめぐって」(佐藤秀明・西本匡克・松本徹、司会・山崎國紀、一九九一・十一・九、花園大学)の発表をもとに執筆された。このシンポジウムの発表者の発言部分は『解釈と鑑賞』(一九九一・九)に掲載されたが、本論はそれに大幅な加筆訂正をしたものである。